

丁寧に「手入れ」したものに 豊かな心も学ぶ心も宿る ……その1



～大ベストセラー『バカの壁』の著者が
教育現場へ送る熱いまなざし～

豊かな学びを応援します

文化芸術情報誌 Newえるふ より

テーマ：「手入れ」という視点

特集 養老 孟司 氏（解剖学者・作家）

「手入れ」が生み出すもの

「日本人は、自然をちゃんと相手として受け入れることを1000年以上にわたってしてきた民族です。手つかずの自然が残る世界遺産の屋久島や白神山地は素晴らしいけれど、全てが自然のままというのは、人が生きていく上ではやっかいなもの。

そこで始まったのが『手入れ』です。

まず自然という存在を素直に認め、その上で、それをできるだけ自分の意に沿うように動かしていこうとする。これが手入れという思想です。

そうして生まれたのが、『田んぼ里山風景』と呼ばれる日本の原風景。

（途中省略）

もちろん、農家は日本の風景をつくろうとしたわけではない。こうやったら一番良く米や野菜が作れるのではないか、これではどうか、あれではどうかと、ただ必死に日々、手入れをしてきた。そうして、1000年経る中で田んぼ里山風景になったのです。（途中省略）

早く米を収穫しようとやたらに肥料をやっても逆効果になる。つまり手入れをしていくうちに、
努力・辛抱・根性がひとりでに身に付いていくわけです。」



子どもは「自然」の側の存在

子どもは時として予測不可能な行動をとるが、それは子ども自身が自然の世界に属するからだ。それを人工の世界に引き込んでいく過程が子育てだと養老さんは語る。

.....

「極端に言えば、子どもという存在は、放っておけば、地震や台風、津波と同じ。

こうあってほしいと思ったって、その通りにはならない。だから、子どもが取る行動をしっかりと見なければいけません。自然のものでありますから、個々にも違います。どう行動するのかをよく見て、これをやったら具合が悪いなという時に注意をする。そのためには、相手の存在を認めないといけない。

言うことを聞かないからと児童虐待をしてしまうのは、その行動が『あってはならない』と大人がかってに思っているから。

今、泣くんじゃないとか。でも大事なのは、「なぜ泣いているのか？」ということでしょう。相手の存在をまず認め、それに対して手を打っていく。そういうふうにしていくことをなんていうかという、これもまた『手入れ』なんです。

これには辛抱がある。毎日続けられないといけない。自然と同じなのです。」

目の前にいる子どもたちの言動に苦労している先生方。養老さんの「手入れ」という視点から実践を見直してみてください。